

# 宗教心理学研究会ニューズレター

第16号 2012.3.20

## 宗教心理学研究会

*Society for the study of psychology of religion*

### 目次

#### ■第9回研究発表会

|   |         |    |
|---|---------|----|
| 第9回研究発表会報告                                | 報告 武田正文 | 1  |
| 今回のワークショップに参加して                           | 恩田 彰    | 7  |
| どのような「宗教」(あるいは「仏教」)概念から出発するかは、異なった研究成果を生む | 葛西賢太    | 9  |
| 眩いたことを纏めつつ...                             | 太田俊明    | 10 |
| 研究人生の一步を踏み出した記念日・回想                       | 酒井克也    | 11 |

#### ■2011年度 懇話会

|                                      |       |    |
|--------------------------------------|-------|----|
| 研究を愉しむ—宗教心理学研究会懇話会の個人的な感慨            | 大村哲夫  | 13 |
| 第1回宗教心理学研究会懇話会に出席して                  | 岡田正彦  | 13 |
| 鎮魂の祈り、救いのことば—ヒロシマとフクシマを経て宗教心理学がむかうもの | 川島大輔  | 15 |
| 宗教心理学研究会懇話会2011感想                    | 久保隆司  | 17 |
| 懇話会に参加して                             | 橋本広信  | 18 |
| 宗教心理学研究会第一回懇話会に参加して                  | 森定美也子 | 19 |
| 事務局からのお知らせ                           |       | 21 |

#### ■第9回研究発表会

### 第9回研究発表会報告

報告 武田正文(浄土真宗本願寺派高善寺  
特定医療法人大慈会 三原病院 心理療法師  
島根県スクールカウンセラー)

2011年9月16日、日本心理学会第75回大会(@日本大学)ワークショップにおいて「宗教心理学的研究の展開(9)—仏教(仏教徒)と宗教心理学—」が行われた。本ワークショップでは、日本人にとって古くから関わりの深い仏教と宗教心理学との関係について検討し、そして、話題提供では「仏教を対象とした調査研究」と「仏教徒としての宗教心理学」という2つの視点から報告が

なされた。

話題提供として報告された寺院従事者(横井先生)や僧侶(武田)、一般参拝者(中尾先生)を対象とした心理学的研究は新しい試みであり、今後の宗教心理学の発展する一つの可能性が示されたものと思われる。また、葛西先生からは、瞑想を中心に心理学としての仏教の紹介がなされた。そのうえで、仏教の心理学的な研究にあつ

ては上座部や大乘というように仏教の幅広さを理解し、自らの位置づけを理解する必要があるとの問題提起がなされた。そして、太田先生からは、西山浄土宗教学研究所に所属されているという立場から、教団が宗教心理学を受け入れる際の微妙な葛藤について報告がなされた。以上のような話題提供に対して、恩田彰先生より指定討論をして頂いた。恩田先生は、それぞれの研究における発展のヒントをご示唆頂いた。そして、宗教心理学研究における研究者でありながら仏教者であるという立場の難しさや面白さを、先生のお姿を通して示して頂いたように感じた。それでは、これからワークショップで行われた報告や議論を、フロアからの質問やコメントを含めて報告したい。報告者は、話題提供者の一人であった武田である。

## [話題提供]

### 1. 『寺院従事者の役割受容感の規定要因を探る—浄土真宗本願寺派寺院への量的調査から—』: 横井桃子(大阪大学大学院)

寺院における活動には、法要だけでなく、清掃や荘厳、布教・教化、社会的活動など様々なものがある。そして、この活動の担い手は、住職だけでなく住職の家族の理解と協力が重要となる。特に住職の配偶者の役割は非常に重要である。

浄土真宗寺院における住職の配偶者を“坊守”という。坊守の役割は、「住職を補佐し、教化の任にあたる(本願寺派持続規定第4条)」である。坊守に関する先行研究としては、真宗学や宗教学、歴史学といったものや、本願寺派による宗勢基本調査などが挙げられる。しかし、現在における住職と坊守の従事パターンや意識については研究がなされておらず、社会心理学的な枠組みから、より深層的側面に触れた実証研究が必要だと考えられる。

そこで、浄土真宗本願寺派の一般寺院410寺院を対象に郵送調査を実施した。回答数は124寺院(回答率30.24%)だった。調査内容は、寺院活動項目尺度15項目、役割受容尺度27項目(三川, 1990)、平等主義的性役割態度スケール15項目(鈴木, 1994)及びフェイスシートである。

まず、寺院活動項目に対して階層的クラスター分析を行った。その結果、住職の従事パターンとして、全般型、低従事型、寺院重視型の3つの類型が示された。また、坊守の従事パターンとして、全般型、低従事型、裏方型の3つの類型が明らかとなった。

次に、従事パターンが役割受容意識に与える影響を検討するために重回帰分析を行った。その結果、住職は、年齢が高まるとともに、自身の役割への受容感が高まることが示唆された。坊守は、年齢が高まるほど、また、性役割態度が平等思考であるほど役割への受容感が高まることが明らかとなった。さらに、低従事型の坊守と比べ、裏方に従事する坊守や一般的に従事する坊守の方が役割への受容感が高いことが示された。以上の結果から、性別役割態度や従事パターンは、住職の役割受容感には影響しないが、坊守の役割受容感に影響を与えていることが明らかとなった。

今後の課題として、寺院の社会活動・社会貢献と言う視点からの研究が必要であり、住職だけでなく坊守・寺族が地域にどう関わるかを検討する必要がある。その際、量的・質的両面からの調査研究を行うことが求められる。また、住職と坊守を1組とした対人認知の観点からの分析を行うことも今後の課題である。

### 2. 『臨床心理学的観点からみた浄土真宗僧侶の宗教活動と宗教心理』: 武田正文(浄土真宗本願寺派高善寺, 特定医療法人大慈会 三原病院, 島根県スクールカウンセラー)

臨床心理学では、カウンセリングなどを通して悩みや症状の改善、または、より生きやすくすることを目的としている。それに対して、仏教は、各宗派により方法論は異なるものの、苦からの解放として仏に成ることを目的としている。こうして両者を比べてみると目的が重なるところがあるように思われる。

しかしながら、仏教の形骸化という言葉が多くあがり、現代社会における僧侶の役割が問われている。確かに現在の僧侶の役割は、葬儀や年忌法要、法座など儀礼的な活動が中心とな

っている。こうした活動を指して形骸化が主張されてはいるが、僧侶として活動している発表者にとっては、儀礼が門徒(檀家)に対して心理的な影響を与えているように思われた。そこで、浄土真宗僧侶にアンケート調査を実施し、僧侶の宗教活動に対する意識と、活動の実態を明らかにし、それらが門徒のメンタルヘルスに果たす役割について検討した。調査では、儀礼的活動(通夜葬儀、七日参り、法座など)に加えて、門徒の危機的状況への関わりとして、「心の悩みについて相談を受ける」、「死に直面した門徒と関わる」、「家族の死に悲しむ門徒と関わる」といった場面についての意識と活動の実態について検討した。

その結果、僧侶は、全ての宗教活動において「とても重要である」が半数以上であった。しかし、活動の頻度が減少していることが明らかとなった。理由としては、過疎高齢化による儀礼の減少が挙げられていた。また、危機的状況への関わりの頻度は非常に少なく、平均僧侶年数が30年であるのに対して相談を受けたことが10回以下と答えた僧侶が約7割となった。つまり、危機的状況に関わる頻度は3年に1回あるかどうかという程度であり、こうした点において僧侶の関わりが不十分であると言える結果であった。

次に、自由記述の結果から、僧侶が宗教活動ごとに門徒に異なる心理的な意味を提供しようと意識していることが明らかとなった。僧侶は、通夜葬儀から始まり、七日参り(葬儀後1週間おきに行われる)、年忌法要(数年おき)と時間の経過に合わせて、「故人の人生を振り返る」作業を行いながら、少しずつ「教義の理解」を深め、「命の大切さを知る」という関わりをしていることが示された。この点には、門徒の喪の作業に合わせる関わりであり、グリーフケアという観点から臨床心理学との協力の可能性が考えられる。

また、法座と呼ばれる寺院における行事では、「非日常の機会」を提供し、門徒が「自分を振り返る」ことを期待していることが分かった。その際、パーソナリティや価値観の形成などといった役割も期待され、さらには、地域社会と密接に関係していることからコミュニティに働きかける役割もあることが示唆された。

そして、危機的状況における僧侶の関わりにおいて、宗教者としての特徴がみられた。門徒の死に対して、「宗教的死の意味づけ」がなされ、「ただ念仏」や「一緒に読経」といった関わりは、僧侶にしか行うことのできないメンタルヘルスの役割が示めされた。こうした関わりは、特にスピリチュアルケアという領域に示唆する点があると考えられる。また、「ひたすら話を聞く」や「共感する」という意識が高く、こうした関わりにおいては、カウンセリングなどの理論や技法から僧侶が学ぶことは大いにあると考えられる。

以上のように仏教と臨床心理学がお互いに貢献しあう可能性の大きいことが示唆されたが、安易に結び付けることの危険性があると考えられる。両者ともに専門性の高い分野であるため、表面的な理解で実践すると、逆に人々のメンタルヘルスを侵害してしまう可能性もある。そのため、宗教心理学では仏教と心理学(臨床心理学)を統合していくうえで、理論的な研究のみでなく、実践的な研究を重ねることで、仏教と心理学(臨床心理学)の架け橋となっていくことが求められるだろう。

### 3. 『一般大衆における仏教信仰の一側面—天台宗寺院における参拝および写経からみえるもの—』: 中尾将大(大阪大谷大学)

情報が溢れる現代社会では、人々の選択肢は非常に多くなっている。こうした環境下で、現代人は、就職活動やボランティア活動、労働、婚活などを通して「自己の目標実現」に向けて日々努力し、行動している。また、人々は、自ら環境に積極的に働きかけることで自らの置かれている環境、状況を快適なものにしようと努力している。

しかし、こうした努力をしたとしても、仏教で一切皆苦というように、常に自身の方略が功を奏し、うまく環境に適應できるわけではない。そして、このような状況が長引くと、うつや自死、他者や社会への攻撃行動に陥る危険性がある。こうした危険性を回避する一つの手段として、自己を超えた「仏との対話・交流」があると思われる。無量寿経では、自力ではどうにもならない事象を私の思量を超えた仏智に託すことで精神的安寧を

得るといことが説かれている。

今回の発表では、天台宗寺院における一般参拝客にみられる「写経」を通じて一般大衆の信仰形態について考察する。分析の対象は、主に写経に書かれた「願い事」とする。

もともと写経とは、印刷技術がなかった時代に僧侶が教を学ぶために一つの経典を自分で書き写すことであった。それが、熱心な信仰心を具体的な形にするという意味合いももつようになった。中尾・井上(2009, 2010)は、写経を年単位で継続することで、人間関係の改善や精神的安定といった心理的効果がみられることを明らかにした。

調査は、京都市左京区大原にある天台宗寺院、魚山来迎院にて、写経を行った33名を対象に行われた。この寺院は、看板がなければ気づかないような人里離れた場所にあり、参拝者にとって「非日常的空間」である。

調査の結果、参拝者の多くは都心部に在住しており、行楽の時期に来迎院に訪れたものが多いことが明らかとなった。参拝者は、非日常的な空間に身を置くことで、日常生活における「ままならぬ事柄」あるいは「悩み」と向き合い、自己を客観視する。そして、写経に願を託して仏と交流し、日常の「苦」の解決を願う。

こうした参拝者が、自分を客観視し、意味を見出すことが、そのまま「仏からの呼び声」、すなわち、人生からの問いかけとなっていると考えられる。また、自分の直面する苦悩の意味を見出すということが、「仏智の働き」、「救いの働き」と感じられているのかもしれない。こうして参拝者は、精神的安寧を得て、また日常の環境に戻るのである。

また、参拝者は、写経をしたからといって直ちに願いがかなったり、苦悩が解決したりするとは思っていないようであり、むしろ「人生を後押しする」という役割を期待しているように思われた。この様子は、仏智の働きに全てを託して、あるがままに生きることができれば、自然と苦しみから解放されて、幸福な人生を歩めるという仏教でいう自然法爾を表しているということが考えられた。

#### 4. 『教団に対する宗教心理学からの繋がりがづくり』:太田俊明(西山浄土宗教学研究所)

教団の活動として、教学(宗派学)・布教(教化)・儀軌・社会貢献・実務の5つの柱が挙げられた。さらに、この5つの柱に加えて、教団は、信仰者に対して宗教的・教学的・心理的なサポートをすることの重要性が指摘された。しかし、現状では、教学(宗派学)が宗教的な体験・経験を忘れがちであるということもあり、宗教心理学をあまり重視していないという状況とのことだった。

教団の抱える宗教心理学への繋がりにくさは、宗教心理学が確固たる立脚点をまだ確立できていないことや、心理学を教学の中に取り入れることに対する教団側の恐れがあることから生じている。そして、こうした現状を変革するヒントとして次の5点が提示された。①文献を現代語訳し、その上で信仰者の体験と照合し集積する方法、②儀軌を中心に宗教意識が変化したか否かアンケート形式で調査する方法、③信者のやりとり。及び信者間の交流によって意識が涵養されるかどうか見ること、④伝法・伝戒での体験を体系化する方法、⑤信仰者のライフコースから体系化する方法、である。

話題提供においては、太田先生の体験を交えながら特に④と⑤のことについて説明がなされた。加行という宗教体験を通して、僧侶としての意識促進と自己を超えた存在に気付かされ、その時に授与された伝法の巻物に興味を惹かれたそうである。そして、この宗教体験とインテグラル・サイコロジーの構造と共通点があるということについて図を用いながら説明された。

また、教団と宗教心理学との懸け橋として「仏教カウンセリング」が紹介された。ここでは、宗派を超えて宗教観や人間観を語り合うことについて、教団の在り方や宗教間の対話について理解を深めることができるだろうとのことだった。そして、宗教心理学は、教団における理論と実践を結ぶ役割を果たす可能性があることが述べられた。

最後に、東日本大震災をきっかけに仏教者の役割が問い直されており、仏教カウンセリングやビハーラといった活動は、僧侶の心理的援助役

割の可能性を示唆している。このように、仏教の役割を問い直す過程では、教団や教学という問題に加えて、法律的な側面も視野に入れる必要があるという指摘がなされた。

##### 5. 『仏教の心理学的な研究にあたってはどのような課題があるか』: 葛西賢太(宗教情報センター)

仏教は心理学的要素を含んでいるので、心理学がその理解深化に大いに資することはいうまでもないということを前提とし、本発表では、心理学的手続きに加えて、広く仏教を見渡す視座を得ることと、その障害となるものを知り活かすことが必要であることを中心に、仏教の心理学的な研究における課題として、三つの提案がなされた。

まず、仏教の二つの修道論がある。上座部は、苦・集・滅・道という診断的観察を通して、信じる対象を持つのではなく、観察知を得る。これは、現在は、心理学的マインドフルネスや、ストレス低減、リラクゼーションとつながり医療的実践への応用がなされている。次に、大乘では、六波羅蜜という善行と仏への仰慕という、信じる対象をもつ宗派もあり、信仰が重要なテーマとなる。日本仏教の多くは大乘であり、それを当然の前提として仏教は語られている。しかし、両者には容易には埋めがたい差があり、こうした点を看過しては仏教を真に理解することはできない。

次に、仏教は、知覚から意識にアプローチをするという点において心理学と捉えることができる。あらゆるものが刹那滅であることを理解し、執着を去る状態を作り出すことにより、苦を滅することを目指す。この点において、仏教は無情観(ニヒリズム的)と捉えられることもあるが、本来は無常観(変化の観察と認識による受容)である。知的考察のみではニヒリズムに至ってしまうが、瞑想の文脈では、出会いの貴重さへの感謝にも道が開かれることもある。つまり、仏教は、事物や現象の直接観察および、瞑想を介した直観をベースにつくられている。それに対して、現代心理学は、内観を踏まえつつ、物理学をモデルとしてつくられている。この相違を自覚して対話が可能にな

る。

そして、3つ目に仏教における体験概念の意義について再考することを提案した。単なる体験至上主義とは区別されるが、指導者には実践が求められる。なぜなら、生じてくる現象を知らなければ、アドバイスもできない。実践を踏まえると、仏教におけることばに絡めとられるように体験の理解が深まっていくと考えられる。

以上の3点の提案を踏まえて、近年の瞑想の広がりから、課題が浮かび上がってくる。上座仏教系の瞑想と認知心理療法の結合したものとしてMBSR(Mindfulness Based Stress Reduction)などがある。しかし、この実践では仏教については気がつかないままに「マインドフルネス」を輸入するセラピストがおり、また、「マインドフルネス」について日本の仏教徒がうまく語れないという課題が生じている。

そもそも、日本人だから仏教全体について知悉しているという誤解がある。僧侶や仏教についての研究者であっても所属する宗派の実践に通じているのみで、他宗派の教えや実践には不詳であり、特に原始仏教や上座部について理解しているものは少ない。こうした状況であるため、仏教一般とは何かという問いに答えることができない。

そこで、そもそも仏教がどんな心理学であるのかを確認し、誰の理解に寄与するか、自らの仏教観を問い直し明示すること、仏教の多様な広がりとその位置づけを踏まえ、自らの立ち位置を確認することが今後の仏教の心理学的研究において必要となるだろう。

#### [指定討論]

指定討論者: 恩田 彰(東洋大学)

まず、いずれの研究も宗教心理学と仏教(仏教徒)との関係においては新しい研究で、初めて先生方がなされた研究といってもよいだろう。

例えば、横井先生の研究における坊守は、寺院の活動において住職と表裏一体の関係であり、非常に重要な役割を果たしている。特に坊守は、門徒との会話の中でいわゆるカウンセリングをやっているといえる。さらに、こうした会話を通

して、坊守は住職をサポートして寺院の宗教活動を促進する働きがあると考えられる。今回の報告では、内面的な研究はここではなかったが、今後の研究では、住職や坊守の生活史、どういう風に宗教と関わってきたかという深層心理の面接調査を行ってみることを提案したい。

武田先生は、浄土真宗の僧侶であり、病院の臨床心理士であり、学校のカウンセラーであるということであり、一方は、仏教の研究や宗教の研究をやり、求道者であり、研究者である。こうした立場で研究・実践をしていると、自分でやっていることに矛盾を感じることもある。それは非常に苦しいが、それを越えると徐々に統合されてくる。教義の理解を深めながら、実践的にどのような問題があるかが見えてくるようになる。仏教における悟りの境涯を高めていって、初めて本当の教化や研究が行える。そういう面、現在の大事な立場を大いに利用して今後の研究・実践に励んで頂きたい。

中尾先生の具体的な写経の研究で大変有意義である。研究のなかで、仏の智慧の働きを借りて、心願成就をする写経とあったが、これは仏の智慧だけではない。私たちに内在する智慧と捉えれば、創造性として理解することができる。つまり、仏の創造性は、私達の創造性であると感じれば、教化活動も研究も進むだろう。こういう問題は、智慧というものを言葉だけじゃなく、私達のものという自覚をして、つかまれることが重要である。しかしながら、浄土教では、下手をすることという部分に消極的になってしまうことが予想される。つまり、われわれが患者だという自覚の奥底に光っている智慧に気づくことが大切である。こういう面は、教団としての取り組みをもっと積極的にやるべきだが、どうも教義にとらわれており、今後、教義を越えていくということを考える必要がある。

葛西先生は、瞑想の研究をされているが、私も昭和36、37年に、禅の医学的・心理学的研究で瞑想の研究を行っていた。そもそもこうした瞑想の研究は日本から発信し、世界に広がり、バイオフィードバックや心身症の治療などにも応用されていった。こうした研究を行っていると、物理学の

理論の予見にもとづいて実証が行われるというように、この理論研究と実証研究が分かれていて、一つにまとまっていくという流れが、人文科学の研究にもみられるということが分かった。また、二つの修道論とあったが、その通りで日本における坐禅は一つの方法でしかない。サマタとヴィツパサナーという方法があり、中国のほうは一点に自分を見つけて集中するというサマタが強かった。これは、生じてくる現象に集中し、自発的に注意を向けるということをする。密教や坐禅、念仏、題目という大乘仏教と呼ばれるものはほとんどサマタにあたる。その一方で、ヴィツパサナーは、ミャンマーやスリランカの人が教えてくれた。このように仏教の瞑想には二つの面があり、両方の面を捉えるべきである。さらに、ヒンズーサイコロジと仏教心理学の問題があり、ヨガと禅の関係ということも今後のテーマとして考えられるだろう。

#### [質疑応答]

##### (葛西先生への質問)

葛西先生の発表における修道論について、小乗の四諦のところでは診断的観察という説明があった。私は仏教は、因果論的な思考法ではないかと思ったのだが、診断的観察という位置づけを教えてください。

##### (葛西先生のリプライ)

診断的観察という言葉は、仏教のなかでは良く使われる言葉である。釈迦は医者の方の王様と言われることもあり、苦しみを観察することが診断に当たる。仏教の経典のなかにもよく見られる説明です。

##### (コメントとして)

心理学的な方法論を使って宗教にアプローチするという、それぞれ大変素晴らしい研究であった。さらに、今後は、心理学が忘れ、足りないところを、宗教から心理学が学ぶということもあると思われるので、こういったアピールもして頂きたいと思う。

### (太田先生のコメント)

以前、仏教と心理学の文献をまとめたことがあり、およそ 1400 の文献があった。それらのほとんど臨床研究で統計的研究が 500 位だった。また、禅の研究が多く、浄土教の研究が少ないことが明確だった。今後は浄土教を対象とした研究を進めることも重要になるだろう。

### (中尾先生より恩田先生へのリプライ)

恩田先生のコメントにあった教義を越えて内在された智慧という問題に取り組み始めている。妙好人の浅原才市の獲信に至るまでの心理過程の解析を行った。そのなかで、才市の仏を求める気持ち、救いを求める気持ちがあり、それこそが仏性といえるのではないかと思った。そして、それが念仏や生活をしているなかで、増幅してい

たという考察を行った。今後も、内に目を向けた研究についてより一層取り組んでいきたい。

### (恩田先生のコメント)

安心を得たいという話があるが、結局は得るか得ないかが問題である。発願と、その結果の願が成就したという体験を仏教者は持たないといけない。悟った人と悟ってない人、宗教的経験がある人とならない人では全然違う。また、求道とは、これでいいと思ったら、まださらに上があるということである。極楽往生すればいいということではなく、現世においてどこまで境涯が高められるか、そういう面を我々は宗教心理学として研究しないといけない。

## 今回のワークショップに参加して

恩田 彰(東洋大学名誉教授)

今回のワークショップおよび懇話会に参加したが、ワークショップで感じたことを中心に述べてみたい。

1. 横井桃子氏の研究は、浄土真宗の本願寺派寺院の住職と坊守との心理学的比較研究ということで新しさがある。一般に寺院の住職の配偶者は、裏方として住職を支えているが、浄土真宗の坊守には、それだけでなく、教化、布教の仕事が明文化されていることにその特色がみられる。今回は坊守の役割受容感ということで、役割意識、性別役割意識など意識研究まで探究している。今後住職および坊守の個人の生活史の究明から、宗教心理を掘り起こしていただけたらと思っています。

2. 武田正文氏の研究は、御本人が浄土真宗僧侶であり、心理療法士、スクールカウンセラーという複合的役割を自ら担っていることに、宗教心理学的研究を行う立場として、難しさと思われ。一つの役割を担うものとして、他

の役割と合わせ持つことに、初めは矛盾と葛藤を感じずるかもしれないが、その統合を心がけていけば、苦勞はあるかもしれないが、いつしか統合して、それぞれの仕事への自信と新しい発見があると思う。

3. 中尾将大氏の研究では、写経の心理的効果として、人間関係の改善、精神的安定の獲得、苦の解決があげられている。苦の解決は、苦悩の解消ともいわれ、広くいえばあらゆる問題解決である。これらを総括すると「仏の智慧の開発」である。この場合、仏の智慧といっても、自分自身にそなわっている仏性すなわち真の自己の開発であり、誰でも持っている智慧の開発である。私は智慧すなわち創造性、特に仏教における創造性開発について探究している。

4. 太田俊明氏の研究は、宗教心理学と教団・教学とのつながりづくりを提案されているが、多くの問題が取りあげられており、短時間では十分に理解することができなかった。教団は教学を護持

する立場から、僧侶が教学を学ぶことによって一定の教学の概要を身につけることはできるが、他方僧侶や研究者が教学を自由に研究する場合、その阻害要因ともなりうる。そのため教学の新しい発展をめざしながら挫折した者も少なくない。現在の宗教心理学が教団の発展にすぐ役立つとは思えないが、仏教カウンセリングは、信者の信仰を深め、教学の発展に役立つものと思われる。仏道としての加行、伝法、伝戒などの修行の臨床心理学的研究や僧侶や信者の事例研究には、仏教カウンセリングのみならず仏教の対機説法が役立つと思う。

5. 葛西賢太氏の研究は、仏教の心理学的研究の課題に、どんなものがあるのかと問題提起し、まず仏教には二つの修道論があるとす。そこで上座仏教と大乘仏教の二つをあげている。仏教の修行法は、サマタ瞑想法(止とも呼ばれる)とヴィパッサナー瞑想法(観とも呼ばれる)に大別されるが、上座仏教(上座部仏教)の特徴は、ヴィパッサナー瞑想法にある。それに対して大乘仏教といわれる禅、念仏、密教の行法は、サマタ瞑想法である。サマタ瞑想法は、一つの対象を設定して精神(注意)を集中する方法である。これに対してヴィパッサナー瞑想法は、瞬間瞬間に起っている現象に注意を集中して気づき、それをコトバにあらわして確認していく方法である。私たち日本人は仏教について学んできたことは、主として大乘仏教といわれる北伝の仏教であり、その行法はほとんどサマタ瞑想法である。これに対して南伝の仏教は、初期仏教(原始仏教)として、教学として日本に入ってきた。しかしヴィパッサナー瞑想法は、最近になって、上座仏教の僧侶によって伝えられている。

私は長年禅に親しんできたが、サマタ瞑想法により三昧を体験することで空をつかむことができた。しかし縁起については今一つ納得できていなかった。しかし最近上座仏教のヴィパッサナー瞑想法によって、縁起が今までよりも、よりはつき

りと見えるようになったと思う。

葛西は、宗教心理学の重要な課題として、瞑想を取りあげている。葛西には名著『現代瞑想論』(春秋社、2010年)がある。昭和36、37年の2ヶ年にわたり、文部省科学研究費による総合研究「禅の医学的・心理学的研究」が東洋大学学長の佐久間鼎先生を中心に、京大の佐藤幸治、九大の秋重義治、東大の笠松章、東京慈恵会医科大学の高良武久の諸教授など七大学の研究者によって行われたが、私は東大の精神科医平井富雄博士と共に、その研究の幹事をつとめた。そして禅と創造性との関係について研究してきた。平井先生は、佐久間鼎先生の『黙照体験の科学』(昭和23年)、『神秘的体験の科学』(光の書房、昭和27年)の中に黙照体験すなわち禅定体験を脳波で測定すると、アルファ波が出現することを理論的に予見しているのを見て、禅定の時の脳波を記録してみようと思い立ったという。坐禅の脳波的研究を含むポリグラフ的研究が、平井先生の博士論文となり、この研究が知られるようになった。そして私たちの禅の科学的研究の基礎になった。これらの研究が世界的にひろがり、瞑想の研究がひろく行われるようになった。後に早稲田大学の春木豊教授を中心にして、オーストラリアの臨床心理学者の Mark Blows 氏も参加し、国際的な瞑想研究が行われるようになったのである。そしてヴィパッサナー瞑想法が、Mindfulness という概念で、認知心理療法として発展していったと思う。

以上5人の話題提供者の発表について概観したが、何れの研究も私にとっては新鮮であり、感銘を受けた。

#### 参考文献

- 恩田 彰 「創刊に寄せて」 『日本仏教心理学  
会誌』第1号 2010年、3～4頁。  
平井富雄 『禅と精神医学』講談社 1991年。



## どのような「宗教」(あるいは「仏教」)概念から出発するかは、 異なった研究成果を生む

葛西賢太(宗教情報センター)

日本心理学会で行われる「宗教心理学のワークショップ」に参加するのは今回(日本大学)が2回目である。1回目は、2009年の、立命館大学での大会においてであった。1回目は「回心」概念の宗教心理学内外での変化に注目し、また、2回目は、「仏教」をどのように捉えるか、われわれがぶつかると思われるハードルについてふりかえることを提案した。いずれも、「宗教」を捉える多様な視点の存在を強調し、単一あるいは少数の定義によって宗教心理学的研究を進めることの問題点を指摘した。宗教学者としての私が貢献できる領域の一つであると考えたからである。

インプットされるデータによって、アウトプットには違いが生じる。個人的な信念や思い入れが、インプットの違い、そしてアウトプットの違いを生じることもある。生まれ育った環境は私たちにとって変えられないものであるにしても、自らがどのような宗教的傾向(あるいは非宗教的・不可知論的傾向)をもっているかは、宗教についての心理学的研究をする者は吟味しておかなければならないだろう。自らの傾向を無反省にあらわにした自称「研究」が、心理学において歓迎されないことは言うまでもない。宗教的傾向をもっているから客観的な研究ができない、あるいは、非宗教的だから・不可知論者だから、客観的な研究ができる……このような素朴な信念によるのではなく、どのように対象を自分は見ているか、万人が問う必要があるだろう。

宗教心理学にとって隣接する宗教学という研究分野での成果は、対象としての宗教をどう捉えるかという課題を吟味するのに有意義であり、その部分を欠くことによって生じたゆがみは、客観的な看板をになうがゆえにかえって難しい問題につながることになる。

そして、近年の宗教学は、宗教概念が近代においてさまざまな恣意的な力によってつくられてきたものであること、私たちの宗教観は最初から特定の色を帯びていることを、繰り返し明らかにしてきた。「仏教と近代」を考えるこの秋の国際研究集会で、主催者の末木文美士は、以下のように述べている。

従来の仏教研究は、古代・中世が中心であった。とりわけ、中世の鎌倉新仏教を最高峰とみて、それ以前はその準備段階、それ以後は次第に墮落していく過程とみる見方が暗黙の了解をなしていた。しかし、今日、そのような常識は崩壊しつつある<sup>\*1</sup>。

日本の近代化の中で、キリスト教との出会いと対抗、植民地化される諸国を横目に見ながら、近代化を支える理念としての仏教の再構築。そして、そのために宗派の内外で活躍した、進取の気質をもった志ある僧たちの存在。これらが、結果的に浄土真宗などの鎌倉仏教を強くアピールする結果となったことは、日本史の中で誇られるべき努力でもある。それが現代日本人の仏教認識にもたらした影響を、彼等への経緯とは切り離して分析することの必要や意義が問われているわけである。

今回のワークショップで、私は、日本人だから仏教全体について知悉している、少なくとも一定の常識的知識は持っている、というのは誤解ではないか、と呼びかけた。多くの日本人は、自分の身近にある宗派しか知らないし、その延長で仏教のイメージを形作る。上座部仏教が伝統として引き継いでいる四諦八正道の理念と理想的だが模範としての人間釈迦、一方で、大乘仏教が六

\*1 末木文美士「趣旨説明」『第41回国際研究集会「近代と仏教」』国際日本文化研究センター、2011年10月13日～15日、11頁。

波羅蜜という善行と超越的な仏を立てていること、両者がもたらす「宗教心理学的な」違いに配慮する必要を指摘した。加えて、日本人にとってこれまで身近な実践としては存在しなかった上座部仏教が、近年、仏教瞑想の心理学的・医学的応用によって再輸入されて、仏教徒は何なのか私たちに再考を迫っている現状を指摘し、ワークショップ全体にたいして比較検討対象として提案した。

私が提案した比較は、「宗祖に帰るか、釈迦に帰るか」という、近代仏教史上繰り返し問われてきた、いまではやや古典的になった問いの再確

認ともつながる。仏教概念、いいかえれば私たちの仏教観が、日本の近代化努力の影響を強く受けて独得の色を帯びていることは、宗教学ではすでに常識となっているが、仏教徒の間では、また心理学者の間ではそうなっていない。それを明らかにしても、心理学の理論を大きくバージョンアップすることにはならないかもしれないが、対象についての作業仮説の設定の精緻化には貢献できるだろう。なぜなら、今回あるいは以前のワークショップで提示されたモノグラフは、蓄積されれば心理学者の手を離れ、「仏教一般」「宗教一般」のイメージ構築に寄与するからである。

## 眩いたことを纏めつつ ...

太田俊明(西山浄土宗教学研究所)

私は本来「仏教学」の出身であり、「宗派学」の研究を可能な限り避けてきた。理由として、主観と客観の混同による価値観の混乱が生じかねないことが挙げられる。にもかかわらず、今は縁あって宗派の研究所で「仏教学」と「宗派学」と仏教の違いを整理しながら、これらが仏教者内部でも混同されている現実を見続けている。この混同を多くの人は理解していない。先日某会議の席上、ある政治家が「宗教学者こそ客観的であり、その役割に期待する」旨の発言があったという。では本当に宗教学や宗教研究者が真に客観的であろうか。私は「否」と考える。むしろ主観の集合体であり、平面的視座による生きていない「客観」という印象がある。その上で、社会的認識の無理解さを感じる。

私見であるが、宗教学は宗教現象を通じて科学化する学問である。仏教学は文献学を中心に「客観的(宗派的視点を除いた)」な視点から科学化する学問である。しかし、これらの学問上の科学化には「生かされている」実感は味わにくいものである。ところが、仏教は「生かされもの」であり、今も宗教として活かされている。その活かされている仏教を背景に成立する宗派学には、現場が存在する。現場が存在するということ

は、信仰者内面に対する「教化」や信仰者以外への「布教」も生じる。この一点からだけでも「布教」と「教化」すら仏教者・心理学者共々混同している現実が理解出来るのではないか。故にストリートレベル的な視点、臨床的な場面を元に仏教信仰、曳いては教団、「教学」と云う名の「宗派学」も成立していると考えられる。

従って、今を「生かされ活かされている」仏教者にとって「似て非なる学問分野の二重性」を通じて混乱している一面があること。その中で「宗派学」を中心に、宗教心理学との接点を作ることで教団との関係について伝えたかったのである。

しかし、今回の発表は2つの理由より、解り難かったのではないか。1つ目は宗派学の立場と教団の立場が混同していることが挙げられる。しかしこの混同こそが宗派学の現実であり、現状の一端を知っていただけたのではないか。2つ目は、現場から作り上げていく教学にしてはあまりにも事例が少ないことも挙げられる。この点に関しては理論的に構築された教学を教団の枠を超えた数多くの事例を通じて、どのように受け止められるか。その為には教団の枠を超えた情報交換が必要となる。

ただ、発表後の席で何人かと話すことにより、

少なくともその中では理解が進んだ一面もあった。同時に、表面的な説く課題のみの「対話」だけでなく、各々の信仰心の本質をえぐり出し、表す本当の意味での「交流」が必要なことも痛感した次第である。

紙数の都合もあるので、発表後に考えたことは以下の6点である。他の発表者と異なりいわば「後発教団」に属し、かつ宗教心理学に対する理解が進んでいない教団の中で浮かびつつ ...。

1. 心理学側から見た仏教の見解について、「宗教学」と「仏教学」と「宗派学」の区別がつかないまま研究が展開されている一面があること。このことは理論と実践の混同につながる恐れがある。
2. 心理学からの仏教研究は数多く行われているものの、それらの研究が仏教者に真に伝わってきていたであろうか。このことは仏教者と心理学者との「バリア」に繋がり、そこから宗教心理学と言う学問自体の疑義が生じるのではないか。
3. 仏教者の中で最も重要視されていることとして「対機説法」に基づいた「仏教カウンセリング」である。しかし「仏教カウンセリング」自体、心理学の立場からすれば端極(たんきょく)な位置に存在する学問であり、仏教者のニーズと心理学者のニーズに極めて大きな隔りがある。
4. これらの隔りや相互の情報不足により、心理学者の態度と認識が仏教者にとって、

曳いては教団の担当者が不信感を生じかねないのではないか。

5. 「宗派学」には(各々の)宗門当局(及び事務担当者)の政治的・行政的作為(不作為も含む)による教学の誘導という問題がある。しかし、それ以上に一部の仏教教団による(仏教界を誘導するような)戦略から「教団の枠を超えた」活用に向けて視座の転換が必要なこと。特に特定教団のセクショナリズム性を改めて感じたことが挙げられる。宗派学自体確かに自宗の優位性を持ち出す一面はあるものの、「同入和合海」の如く他宗に対しても壁を持ちつつ協和する必要がある。この点で一部の教団における宗門人教育が不十分な印象を受けた(と同時に私自身も再認識した)。したがって、宗派学の真意と体系を学ばずして宗派僧侶として行ずることが学問の客観性をもたらすどころかかえって誘導性をもたらしかねない危険性を感じた。宗派に属する僧侶としての気持ちは伝わるが、この視座の転換がない限り日本仏教(曳いては宗教界)自体の在り方が問われるのではないか。
6. 最後に「仏教学」と「宗派学」との区分けを通じて、仏教者と心理学者との間での対話の促進。これにより宗教心理学の研究も促進され、曳いては仏教者(宗教者)間の建設的調和を通じ社会貢献に繋ぐ一助でありつつ ...。

## 研究人生の一步を踏み出した記念日・回想

酒井克也(出雲大社和貴講社)

2011年9月のよき日、私は勇んで宗教心理学研究会のワークショップへと出かけた。研究会の集まりはもとより、日本心理学会への参加も初めて。見るものはすべて新鮮だ。ポーっと生きてきた日々を捨て、「研究者」というアイデンティティーを確立するための、今日が大事な第一歩である。

日大文理学部キャンパス。深い緑も、新しい校舎も好感が持てる。第一歩にふさわしいではないか。手続きを済ませ、宗心研の教室へと上がる。ああ、ドキドキする。どういふ先生が来ているのだろう。

そこには、汗をほとばしらせ、スタッフや発表

者の先生たちに指示を出す、一人のイケメンが。一瞬、オーケストラを指揮する、若手コンダクターの姿に見えた。これから始まる、フルオーケストラのコンサートを想像し、身震いする。演奏者たちは、一人ひとり皆、個性派ぞろいだ。どんなハーモニーを奏してくれるのだろうか。ワクワクしながら、前から3列目、端から3番目という、もっとも無難な席に陣取る。

指揮者氏が、私の名札を見て「あ、酒井さんですか！ どうも、松島です！」とさわやかに声をかけてくださった。ああ、事務局長の、松島先生！ こんなに若手だったのですね(失礼)！ 入会の折には、右も左もわからないシロート相手に、何度もご丁寧な説明を、有難うございました。いろんな思いが走馬灯のように ... , と思っている間に、発表が始まる。

その内容たるや、私なんぞの筆が及ぶはずもない、ディープ&ハイブローなものばかり。この人たち、「もったいぶる」とか「出し惜しむ」ということを知らないな。「持ってけドロボー」精神むき出しだ！ 研究者とは、こうであれ！ と言われたようで、頭がクラクラする。そんなうつろな状態で、なんとか聞きとった、自分の今後の姿勢に大きな影響を与えてくださったポイントを、挙げてみよう。

・宗教心理学は、グループセラピーや、非構造化面接に適している

言うまでもなく、宗教には「不特定多数に対しての、救いの場」としての一面がある。それは、1対1の個別カウンセリングの限界を痛感する私にとって、不可欠なシステムだ。しかも、時間や場所、価格などの「構造」を設定することなく、その場の触れ合いとアドリブで、癒しを与える必要性に迫られている私にとって、もう学ばずにはいられないではないか！

・宗教心理学は、予防教育的側面を持つ

これまた言うまでもなく、宗教には「転ばぬ先の杖」としての一面がある。何か問題が起こった

から宗教に帰依するばかりではなく、日頃からの心構えとして、宗教と接する人も多い。病理学的な臨床の立場から、予防学としてのセラピーの必要性を痛感する私としては、まさに相応しい学びではないか！

・宗教心理学には、密教的、神秘的部分が存在する

言うまでもなく、宗教には、科学的に解明できない、あるいは解明する必要のない面がある。神の存在、奇跡、悟り、すべては、神秘のヴェールの向こうにある世界だ。そこがいい！ 人間は、「異界」があるからこそ謙虚でいられ、努力ができるという側面を持つ。思えば20世紀、この世のすべてが白日の下にさらされ、解明されると信じて、人はおごり、たかぶり、病んできたのだ。おそれ、かしこむことを、再び思い出すには、良い学びに違いない。

・宗教心理学は、宗教の実践を通して、宗教と心理学を統合する道である

言うまでもなく、宗教とは、実践の道である。体験と実感の道である。臨床心理学もまた、実践、体験、実感がなくては進歩のない世界。二者はまさに、統合、融合すべき宿命にある。私は、神道の学びと行を実践する者であるが、それを臨床心理と融合させることを、まだ果たせていない。これこそ、わが実践の道なり！

・宗教心理学は、個人の内的世界にある創造性を目覚めさせるものだ

言うまでもなく、宗教は、個人の精神性を成長させるためのシステムである。心理学もまた、同様である。ここにも、二者が融合すべき理由がある！ しかも、その目的を、社会に適應するとか、世渡り上手になるとかではなく、創造性を開花させることに設定しているとは、ただの心理学とは、一味違う！ 方向性が、「悟り」方面であることは間違いない。個人の内面に焦点を当てつ

つ、人類をレベルアップさせてしまおうという魂胆を持つ私としては、願ってもない話ではないか！

初体験の連続で興奮し、つい、言うまでもないことばかりを羅列してしまった。このようなことで、今後、学術的な論文を書けるのか、はなはだ疑

問である。がしかし、私の研究者としての人生は、確実に始まった。この小さな第一歩を踏み出したことを、ここに宣言し、気長に成長の過程を見守っていただけることを、図々しくお願いしてしまおう。何卒宜しく願い申し上げます。

## ■ 2011 年度 懇話会

### 研究を愉しむ—宗教心理学研究会懇話会の個人的な感慨

大村哲夫(東北大学)

「たのしみながらやってきた」。先日駒場で行われた宗教心理学研究会懇話会における恩田先生の締めくくりの挨拶である。

今回の懇話会では、従来の親睦会的で緩やかな繋がり研究会から、科研費獲得を目指した研究者集団を摸索する方向についても話し合われた。もちろん従来果たしてきた役割の重要性とその継続も確認した上で、新しい方向に力を注ぐ必要について検討されたのである。研究会のそうした方向性について話し合われるのは、私が参加した中では初めてであった。活発な意見が交換された話し合いの最後の言葉として、冒頭の「たのしみながら(研究を)やってきた」という発言があった訳だが、少なくとも私自身は頂門の一針をいただいたように感じた。「そういえば私は最近研究を愉しんでいるのだろうか」という疑いがあるからである。

研究に専念しようと安定した職を離れた時は、自由になり愉しみと幸福感に溢れていた。自分のためだけに使える時間が豊富にあることは、制

約を受けることなく読書できることを意味し、夢のような時間であった。しかしその蜜月期間も忽ちに過ぎ、「読まなければならない文献」に追われるようになった。読みたい本と読まなければならない文献は、実は同じものであることも少なくないのだが...

私は、「研究をする」というより「学問をする」という言葉に魅力を感じる。古風と言われるかもしれないが、学問をすることで自分自身が少しでも成長をすることを期待したいのである。「研究」ということと「人格」は没交渉だが、学問の中には「よく生きる」ことを目指すニュアンスがある。私にとって「宗教」も「心理学」も自分自身を問い、人間を理解する「学問」としてたいそう魅力的な存在である。

恩田先生の言葉をきっかけにして、もう一度ルケが言うような、生きることと同じ意味をもつ「研究」、「学問」を自分自身に取り戻したいと痛感した懇話会であった。

## 第1回宗教心理学研究会懇話会に出席して

岡田正彦(栃木県立岡本台病院)

2011年9月16日14:00より、東京大学駒場キャンパス2号館におきまして、記念すべき第1回宗教心理学研究会懇話会が開催されました。

私は、日本心理学会会員でもございますので、前日より同学会第75回大会に参加させていただ

いておりました。

勿論、同日の宗教心理学研究会主催のワークショップにも参加させていただいておきまして、その雰囲気そのまま引きずって(興奮冷めやらぬまま)、記念すべき第1回宗教心理学研究会懇話

会にも参加させていただきました。

私は、普段、臨床が日常の中心ですので、学会や研究会というと、何となく敷居が高い印象があったのですが、今回の懇話会は、「勉強会」についてのディスカッションもあるとお聞きしておりましたので、「普段、研究や教育に従事していない私にも参加しやすそう」といった印象を抱き、思い切って参加させていただきました。

集った皆様で簡単な自己紹介の後に、まず、研究会活動全般について、話し合いが持たれました。

「研究発表会」や「公開講演会」等企画的側面、メーリングリストやホームページ、ニューズレター等情報発信的側面、そして、今後展開されるであろう「勉強会」の在り方等、重要な案件が提示されました。

参加された皆様、積極的にディスカッションに参加され、現状や今後の展望等も含めて、大枠が共通理解されていきました。

しかし、そこで、重要な課題となりましたのが、誰がどのように、それらを企画・運営し、展開していくか、といった役割分担の在り方でした。

事務局の松島先生の業務量は、御自身の仕事の傍らに担っていくには、本当に大変そうなおものであることは、研究会会員一同、理解しているところなのでしょうが、懇話会においてもそうだったのですが、とても良い意見が出されて、「それが出来れば本当に素晴らしい内容になりそう」と思っても、いざ、「それを誰が責任を持って、企画から運営まで展開していくのか？」という議論になりますと、「私がやります」と自信と責任を持って手を挙げられる参加者がなかなかおりませんでした。

勿論、私もその一人でした。

忸怩たる思いもありましたが、自信と責任を持って「私がやります」と言えない自分がそこにいました。

日々の業務をこなしながら、仕事に関連した職能団体やボランティア団体に参加し、疲弊している毎日に、新たな業務を自ら率先して受け入れようとする気持ちがなかなか出てこなかったというのが本音でした。

積極的な意見に反して、心中は保身的でした。非常に恥ずかしい限りでした。

上述のような内省もございまして、研究会の企画・運営全てに関わることは難しいかもしれませんが、自分が興味・関心を持ち、今回、懇話会に参加してみようと思う切っ掛けとなりました「勉強会」につきましては、出来る限り積極的に関わらせていただくという思いは、懇話会が進むにつれて、自分なりに固まっていきました。

そのため、「勉強会」のワーキンググループの案が提案され、ワーキンググループの参加者が募られた際には、役に立てるかどうかは別にして、自ら手を挙げ、立候補する自分がおりました。

10月29日は、記念すべき第1回目の勉強会のワーキンググループがございました。

懇話会当日、意気込んでワーキンググループへの参加を表明したわりには、記念すべき第1回目のワーキンググループであったにもかかわらず、私は、午前中の地元栃木県での会合が長引いてしまい、新幹線を利用して向かったのですが、1時間遅れでの参加という、何とも情けない醜態を晒してしまいました。

しかし、ワーキンググループの雰囲気は、そんな情けない私のことも受け入れて下さる、とても温かで居心地の良い雰囲気でした。

また、参加していらっしゃる先生方が、学会のワークショップや公開講座と異なって、とても近くに感じられたというのも偽らざる事実です。

今回、事務局の松島先生からの「勉強会」の御提案を受けまして、興味本位で、のこのこと懇話会に出席させていただいた私ですが、懇話会におけるディスカッションを通して、自分なりに反省すべき機会を与えていただき、今、自分が出来ることということ、ワーキンググループに参加させていただくようになりました。

どこまで広く、そして深く、かかわらせていただくことが出来るか、未だ未知数ですが、臨床を日々続けながら、ライフワークとさせていただいている学問領域でもございますので、出来れば一生かかわっていききたいと思っております。

臨床経験のみで、知識不足は否めませんが、

精一杯且つ一生懸命、精進していきたいと存じますので、今後とも宜敷くお願い申し上げます。

議事録は、大阪大学大学院の横井先生が、とても丁寧に纏めて下さり、メーリングリストに添付

ファイルにて、既に流して下さいましたので、私は、まずは、懇話会に出席しての感想と今後のワーキンググループへの参加の決意表明まで、です。

## 鎮魂の祈り、救いのことば —ヒロシマとフクシマを経て宗教心理学がむかうもの

川島大輔(北海道教育大学)

松島さんから「懇話会の感想を書いてください。」と言われて、二つ返事で受けてしまった後になって、「さて、何を書いたものか。」と悩んでしまい、気がつけば締め切り間近になってしまった。懇話会の内容はすでにまとめられているし、それについて私が付言することもとくにないので、書くことに困ってしまったのである。

そのような中、とある学会に参加するため、広島を訪れていた私は、原爆資料館に立ち寄る機会を得た。ずいぶん以前に平和記念公園や原爆ドームは数回訪れていたのだが、これまで見学の機会を得ていなかったもので、半日をかけてじっくりと見学することができた。昨年以來、「死者は沈黙のことばを発している」「遺されたものの有責性」といった事柄について思索していた私は、広島に、とくに「祈りの場」に身を置くことによって、死者の声をいくばくか聞くことができたように思う。いや、聞くことができたという能動的な体験ではなく、むしろ聞こえてきたといったほうがよいかもしれない。声にならない声、言葉にならない「ことば」が、私に向かって語りかけているのを感じ取ってしまったのである。何を語りかけられたのか言語化することは難しいが、それは私が忘れてはいけないものであり、これから常にその意味について問うていくべきことであるのは、明確に感じられた。これは他の誰でもなく、私に宛てて向けられたものとして聞こえ、そのことに対して私は応答の責任を感じたのである(これには、ある学会の企画で震災後の北茨城を訪れ、人々の語りにも耳を傾ける機会があったことが、密接に関連しているように思う)。他方で、これは私だけの

体験とはいえないことは、資料館に置かれているノートに綴られた来訪者の言葉からも容易にくみ取れる。この自ずと聞こえてしまった声なき声、言葉にならない「ことば」の意味を問うていくこと、そしてそれに応えようとするのが、生者の有責性の表れなのではないか、そのように思うのである。エリクソンの Generativity という概念は、ある世代(とくに中年期の世代)が次世代に向けた有責性を行為や言葉で表すことともいえるだろうが、資料館で私(や他の訪問者たち)が感じたものは、むしろ遺されたもののうちに喚起される有責性である。

広島平和記念公園は、慰霊と鎮魂の場(トポス)である。そこには原爆から被害を受けた人たちや、その方々に関わった人たちのみならず、さまざまな理由で人々が足を運ぶ。その一方で、原爆ドームは世界遺産であり、観光の名所でもある。また小学生などにとっては平和学習の「教材」である。平和記念館には「原爆の熱線によって影となってしまった人」の展示があるのだが、私が訪れたとき、それを「ここにあるよ!」「よし、これで残すは...」とスタンプラリーのように、メモをして回る小学生の一群があった。応答には様々な次元があると思われるが、上記の小学生たちは、死者への応答を行っているようには見えない。原爆投下後に多数の人々が水を求め、無数の遺体が浮いたという川のほとりでは、どこかの修学旅行生の一団が楽しそうにお弁当を食べていた。いまでは、街に当時の記憶を残すものは、特定の碑などを除いてほとんどなくなったという。往時の日常(それは日常とは呼ばないかもしれ

ないが)は、いまや非日常となったのである。ヒロシマは現今の広島の下に沈んで、もう滅多には表層に現れてこないのかもしれない。あるいは死者の声が聞こえたとき、そしてそれに応答しようとしたときにだけ、こうしたかつての日常と今の日常、あるいは日常と非日常の境界を感じることができるのかもしれない。

2011年3月11日に生じた東日本大震災以降、できることを何かしたいと、全国そして世界各国から様々なかたちの支援が行われた。これは未曾有の大震災によって、声なき声、言葉にならない「ことば」を聞いた人々の有責性の表れといえるだろう。しかし、おそらくは数十年の後には、広島と同じように、日常と非日常が入れ替わる日が来るのであろう。そのときにもなお死者の声に応答しようとしているものは一体どれほどいるだろうか。多くの人が忘れ去った後においても、愛する人を失った人のほとんどは、常に死者の声に応えつつ、その後を生きているはずである。そして「宗教」に関わるもの(もちろん研究として関わるものを含む)は、数十年後においても、慰霊と鎮魂の場(トボス)に身を置き、日常と非日常の境界に立ち、死者の声に応答しようとする存在でなくてはならないだろう。

ところで東日本大震災後に、いくつかの報道が、宗教や信仰の重要性を改めて指摘していた。地震発生から半年後のある記事は、引き取り手のない遺体を弔う僧侶について書いていた。「どんな宗派でもいい。お経をあげてほしい」と何人もの人に懇願された僧侶の記事も目にした。人々は鎮魂と慰霊の祈りを、(多様な意味づけの複合体としての)「宗教」に求めているのである。それは、自らでは意味を見出すことが困難な、亡くなった人の声なき声、言葉にならない「ことば」を意味づけ、それに応えたいとの思いの表れである。そして牧師や僧侶など宗教に密接に関わるもの(以下、宗教者)、そして宗教心理学研究に携わるものは、こうした要請に応えることによって、その行為のうちに存在意義を見出すとはいえないだろうか。

しかしながら、それは人間が語りえた「宗教」の物語が、意味のすべてを語りうるというのではな

い。むしろ人間が語りえた物語は、死者の声や「ことば」を語り尽くしえないことを示すのである。「語りえない」というまなざしは、遺されたものにとって救いとなるはずである。それは大きく二つの意味においてである。一つ目は、宗教者は物語を遺されたものに提供し、これを受け取るという認識では、遺されたものは常に受動的な存在となる。しかし死者への有責性は、遺された個々人のうちに常に生じ、死者の声なき声を聞こうと応答するのは、遺されたものの主体的判断によるのである。つまり「語りえない」というまなざしが、遺されたものの主体性を取り戻すために不可欠な条件なのである。二つ目は、信仰とは不可知性への祈りであることと関連する。絶対的に理解しがたい現象を、不可知なものとして、人間の度量では測りえないものとしてみつめ、祈ること、そうした宗教者の「むかい方」を、並び、示すことによってのみ、救いのことばが遺されたものの中に生じるのではないだろうか。

すべてが語りえると認識することは、思考可能なもの、手の届くものとして声なき声、言葉にならない「ことば」を了解することである。「(故人が)天国で見守っている」「仏様に救ってもらった」といった物語が、遺されたものに腹話され、自身の意味として語られるとき、不在のものとしての死者は、存在する死者となる。これは、やまだ(2000)が「死者の無害化」と呼んだプロセスとおそらく同義であろう。しかしながら死者が愛おしい存在であればあるほど、遺されたものの生活や日常を危機的に揺るがすため、無害化はより困難になる。死別から数十年が経過しても、いまだに語りえないという人もいる。さらには、語りえた物語の後に残されるのは、生き残った私が生き残ったという責任をどのように果たすのかという、終わりのない問いが立ち現われてくる。残念ながら、この問いに対する答えは、遺されたものそれぞれが独自のやり方で死者の声に応えていくこと以外に見出しえない。

繰り返しになるが、このように、死者への有責性は、遺された個々人のうちに生涯を通じて常に生じるのである。そして救いとは、死者のためというよりも、生者のためのものである。鎮魂の祈



りという行為を通じて、遺されたものは自らにとって救いとなることばを見出すのである。

宗教心理学研究会は、これからいよいよ学会への昇進を目指していくという。祈りのための足場となり、遺されたものが救いのことばを見つけ出すための支えとなるような研究こそが、宗教心理学が社会からの要請に応えることであり、その動向を後押しすることを信じつつ、はなはだ勝手

ではあるが、懇話会の感想とさせていただきます。

#### 引用文献

やまだようこ (2000). 喪失と生成のライフストーリー— F1 ヒーローの死とファンの人生— やまだようこ (編著) 人生を物語る—生成のライフストーリー— ミネルヴァ書房 pp.77-108.

## 宗教心理学研究会懇話会2011感想

久保隆司(アライアント国際大学)

今回、宗教心理学研究会の懇話会に参加させていただきました。会員になってから6年ほど経ちますが、初めてのことです。ここでは、そのときの感想など、少し述べたいと思います。

9月16日の午後、懇話会の会場は、東京大学駒場キャンパスでした。入り口が分からず、少々迷いましたが、なんとか時間ぎりぎりにたどり着きました。既にほとんどの方が席に着かれています。私は、午前中の日本心理学会に出席していませんでしたし、もとより知人もほとんどいません。幸い、部外者が来たた(?)な眼差しもなく、またお菓子やペットボトルの飲み物なども置かれている気軽な感じのセッティングで、さしたる緊張なく加わることができ、有り難かったです。

今回は、16名ほどの参加者でしたが、臨床心理学系の方がやや多く、宗教学系の方が少ないようでした。また、東京や関東以外からの参加者、西日本、北日本の方も、半数近くいたような案配です。

さて、事務局の松島先生(以下、親しみを込めて松島さん)の司会進行でしたが、松島さんのこの宗教心理研究会を、順調に育てて行きたいという明確な意志が、すぐく伝わってきます。それだけに、なかなか松島さんと同じレベルで会にコミットできる人はそれほど多くないのではとも、勝手ながら危惧しました。しかしながら、70名以上の会員がいる現状であれば、今後、それなりに役割分担をして行くことも可能であり、松島さんへの

負担も多少は解消されるのではとも思われました。

懇話会では、私も何度か発言をさせていただきました。具体的な議題としては、研究会(または勉強会)の発足計画などが検討されました。個人的に関心のある議題があり、また多くの時間がこの件に費やされましたで、以下、このテーマを中心に述べていきます。研究会のような場を作っていくという総論のは、異論はあまり無かったと思います。しかし、入門的、サロニック的な気軽に意見交換をできる場を求め人や、大学院生などに対する研究指導の場であることを望む人、将来の学会の中核的な学術研究の場を求め人など、各人で「研究会」に期待するところが多様であり、その場ではまともませんでした。しかしながら、有志によるワーキンググループをまず作ろうと言う点ではコンセンサスが取れ、先に進むための重要な一歩に成ったと思われま。

事実、皆さんもご存知のように、第一回のワーキンググループが、10月29日の午後に開かれました。私も(前半だけでしたが)参加させていただきました。具体的な話としては、「勉強会」では、まず新刊の『宗教心理学概論』(主に実証主義的アプローチに基づくと思われる)の講読から始め、一定期間(半年?)で終了後は、また別のアプローチや立場/観点に基づく書籍などをパランスよく取り上げて行くことがよいのではないかなど、様々なことが話し合われました。著者のお一

人でもある松島さんが、必ずしも『宗教心理学概論』で採用したアプローチだけを絶対視しているのではないこと、また他の学問的手法に基づく資料も、将来の勉強会で扱っていく可能性に対してオープンであることがはっきりしたことは個人的には良いことでした。本研究会のような様々な学問や信仰の背景を持つ人々が構成員であるような団体では、様々なレベルにおける多様性や多元的な価値観への配慮が非常に重要であり、そのことがユニークなパワーとして、当宗教心理学研究会が存在感を増すと考えるからです。また、個人的にも、勉強会的な場において、普段は敬遠がちであったり、馴染みの薄い手法に接することや、逆に、得意な分野の楽しさや意義を理解してもらう為に苦心することの経験は、多くの参加者にとって、いまだ形成途上ともいえる「宗教心理学」を、より総合的、統合的に触れ、学びを深める絶好の機会となりうると考えるからです。そして、特定の視点に執着するような「宗教心理学」からは解放されて、将来の可能性や、幅広い層に開かれた意義深い学問に成りうるのではと思われまます。

さて、懇話会に話を戻しますと、様々な提案はあっても、何か特定の考えや方向性を押しついたり、正当化するような場ではなく、より多くの人から意見を聞き、吸い上げて行こうという基本姿勢

が尊重されていたので、安心できました。また当日は、学界の重鎮である恩田彰先生にもご同席いただいていた。懇話会の締めとして、学問は楽しむ為にあることを忘れないようにとの短くも深いお言葉を頂きました。結構な時間、真剣な話になされたので、少々、思考も疲れ気味だった参加者も多かったと思いますが(少なくとも私はそうでしたが)、その疲れやモヤモヤを吹き飛ばすようなすばらしいコメントで、いたく感激いたしました。

今回の懇話会は、初参加の私にとって、とても貴重な機会であったと言えます。また、場所を新宿のお店にかえての懇親会も(当初は欠席の予定でしたが、流れで参加させていただきました)、楽しい語らいの場と成りました(席の関係上、多くの方とはお話しはできませんでしたが)。

最後になりますが、事務局の松島先生を始めとして、参加された諸先生方に、あらためて感謝をするとともに、この貴重な未だ小さな宗教心理学研究会が、着実に発展して行くことを祈念いたします。また、個人的にも、できることがあれば、今後も関わっていきたく思っております。

とりとめの無い文章ではありますが、以上を持ちまして、懇話会の報告／感想とさせていただきます。

## 懇話会に参加して

橋本広信(群馬医療福祉大学)

宗教心理学研究会の懇話会に参加することは、それなりの勇気が必要なことでした。会員の方々はどなたも、どこかで「宗教」と「心理学」という二つのテーマと出会ってきたのだと思いますし、私もそうでした。しかし、正面からその二つを融合させた宗教心理を研究テーマとして扱ったことはなく、それを真正面から探求するという前提での集まりに、しかも自分の顔と意見を出しながら参加するというのは、それなりに決意のいることでした。でも、行くことで、何か研究や

発見の手掛かりをつかみたい。このような研究会という場に自らを置き、すでに宗教と心理について取り組んでいる多くの方の間にいることで、自分自身のあるべき姿、立場、研究テーマなどを磨きたい…。ふり返ればあきれほど無駄な気負いと個人的理由をもって、懇話会会場の扉を開けたのでした。

会は、松島さんのリードのもと熱のこもった話が続きましたが、新参者としては聞く話がすべて新鮮でした。会のこれまでと今後の運営につい

て、何よりも継続をしていくことの重要性。臨床における宗教性の扱い。海外の宗教心理研究の流れなどなど。話は多岐にわたり続いていきました。手元のメモには、「臨床の現場でセラピスト側の宗教性を扱うことへタブー視があったが変化が起きつつある」とか、「実存的なものを扱うことから離れていたが、揺り戻しも起きている」など、先生方から出てきた興味深い言葉が残っています。

懇話会、特に「勉強会」についての議論を通して、今回個人的に得られたものはとても大きかったと感じています。それは、自分のものの見方に気付く体験というものでした。松島さんをはじめとして、参加されている方々が自然に醸し出すのか、そこには多様性が柔らかく保護された場の雰囲気がありました。それに守られる形で、それぞれの方が自分の立場に基づきながら、「宗教」と「心」を結びつけた理解を深める努力をされている姿がありました。それぞれの立場からのご意見をお聞きする中で、改めて自分は宗教と人、宗教と心のつながりを、体験というより物語(ライフストーリー)やアイデンティティという軸で捉える傾向があると実感できました。それを深め、さらに広げていくために、具体的にどう研究に取り組むべきか。その手掛かりをいただいたように思います。

懇話会を通してもうひとつ感じたことがあります

す。大きな話になってしまいますが、それは、個々の宗教心理研究の多様性の先にある統合的テーマはなんだろうか、ということでした。大学院時代は伝記分析を中心とした生育史心理学が自分の大きな研究テーマありの研究方法でしたが、そこで恩師からよく言われたことが頭に残っています。それは、「個から普遍に至る」という道筋です。エリクソンの『青年ルター』を例に挙げるなら、ルターそのものを研究することがテーマではなく、「ルターを通して青年期の危機の様相を描く」ことがテーマであり、そうすべきであるという主旨のことでした。具体的な個に即した研究であり、なおかつ多くの人の理解につながるテーマが深められる。それは難しいことでありながら、今でも自分の中で反響しているものでもあります。そもそも、「宗教」という言葉で扱っているテーマは、それぞれの方で異なる多様なものであるというのは、当たり前でもあります。今回の懇話会で改めて実感したのもありました。では、「宗教心理」という言葉でくられるものも多様なままのものなのか。多様さの中にも接点があり、集約されるものはないのか。あるとすればそれはどのようなものなのか。「ともに学ぶ」という主旨のもとに今後「勉強会」が継続される中で、自分の中で統合的な「宗教心理研究のテーマ」を発見できたらと、期待と願いを膨らませた一日でした。

## 宗教心理学研究会第一回懇話会に参加して

森定美也子(和歌山信愛女子短期大学)

懇話会は、日本心理学会の午前中のワークショップの午後に、松島先生のお計らいで、駒場にある東京大学の会議室で行われました。出席者は、心理学会でワークショップの指定討論をくださった恩田彰先生をはじめとして、日本全国から16名、専門分野も宗教学、神道、仏教、心理学、死生学、社会学、臨床心理学、トランスパーソナル心理学など多岐に渡っていました。

自己紹介後、第一の活動全般の議題として、松島先生から、会員数が76名となったこと、将来

的に学会を設立すべく、先を見据えて活動計画を思案しておられるというお話がありました。研究会の活動についての議論の中では、企画、運営、実務と研究会の中心となって、ニューズレターの封筒入れまで空き時間を見つけてしてくださっている松島先生のご尽力に感謝しつつ、どのように松島先生の重い負担を分散させるかも話題の焦点となりました。

第二の議題、勉強会については、東京の他に、関西、東北でも開催の可能性があることにつ

いて意見が交わされました。開催時期については、できれば月一回開くことができれば、活動が軌道に乗るが、それぞれ多忙なメンバーが、果たしてその頻度で定期的に集まることができるかどうかという現実的な問題もあり、頻度や内容を具体的に考えるワーキンググループを設置して考えていくことになりました。勉強会の内容については、まず多岐にわたるメンバーの共通認識を培う意味で、心理学会にあわせてナカニシヤ出版から出版された「宗教心理学概論」(金児曉嗣 監修 松島公望・河野由美・杉山幸子・西脇良 編)を読んでいく案が出されました。宗教心理学研究会のメンバーが主となって執筆された「宗教心理学概論」については、私も日本心理学会で購入して拝読させていただきました。実証的な観点から宗教心理学に関する国内の研究を紹介し、宗教心理学の研究手法、歴史、宗教心理学とスピリチュアリティとの関係、子ども、青年、中高年という各発達段階における宗教的特質、メンタルヘルスとの関係、ターミナルケアやデス・エデュケーションなどの宗教心理学から見た「死」の問題、これからの展望という幅広い視点から概説している良書です。また、各章の「コラム」には、その章に関連する最新の研究情報がまとめられています。この本を勉強会などで詳細に読んでいくことは、メンバーの共通認識を作り上げるうえで、有意義であることは相違なく、「宗教心理学概論」をどのような形で読んでいくか、という視点から意見が交わされました。

勉強会の形態としては、メーリングリストを活

用して意見のやりとりを行うという案もありました。見知らぬメンバー同士では、メーリングリスト上では活発に意見が交わされない可能性があります。顔を合わせる形の勉強会が軌道にのり、メンバー相互のコミュニケーションが増えれば、メーリングリストの意見のやりとりも活性化されることでしょう。

第三の議題、科研費研究プロジェクトについては、残念ながら不採択になってしまった経緯として、全方向的な研究計画があげられることが報告されました。今後の申請の修正点として、プロジェクトの縮小、研究体制の見直しが必要であること、プロジェクトと研究会活動とは部分的に切り離して進めていく必要があることが話し合われました。

最後に恩田先生から「宗教心理学会の設立に向けて、学ぶことの喜びを原動力としてがんばっていきましょう」とのエールをいただき、閉会となりました。

懇話会閉会后、懇親会に向かうメンバーがそろそろまで、正門付近で待ち合わせをしていたところ、メンバーのほぼ全員が、緑の多い駒場東大に住む驚くほどしぶとい蚊の洗礼に晒されてしまいました。口々にかゆさを訴えながら懇親会会場へ移動しましたが、かゆみを忘れるほど宗教心理学の話題で盛り上がり、楽しく有意義なひと時を過ごすことができました。松島先生をはじめ、会場の準備をしてくださった宗教心理学研究会のメンバーの方々、本当にありがとうございました。

## 事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第16号が発行されました。今回の内容は、「第9回研究発表会報告」、「発表者・参加者からの感想」および「懇話会の感想」となっております。

今号も数多くの会員の方よりご寄稿いただき、大変中身の濃い内容となっております。これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。(K.M)

### [宗教心理学研究会の今後の予定]

#### 2010年4月

日本心理学会第76回大会ワークショップ申し込み

#### 2012年5月

第1回勉強会開催

#### 2012年6月

宗教心理学研究会主催 公開シンポジウム開催予定

宗教心理学研究会ニューズレター第17号発行予定

#### 2012年8月

第2回勉強会開催予定

#### 2012年9月11日(火)～13日(木)

(1)日本心理学会第76回大会ワークショップ(第10回研究発表会)開催

[開催校:専修大学生田キャンパス]

(2)第2回懇話会開催予定

発行:宗教心理学研究会

編集:宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当:松島公望[ psychology-religion@office.so-net.ne.jp ]

研究会ホームページ管理・運営

担当:横井桃子[ psych.religion.web@gmail.com ]

研究会ホームページ

[http://www.geocities.jp/psychology\\_of\\_religion\\_japan/](http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/)